

第二章 ムエタイの変容

第一節 前近代ムエタイ 1

第一項 武術としてのムエタイ

Panya Kraitus は、ムエタイの発生と伝承を以下のように説明している。

「スコータイ時代(1238～1377)のムエタイは、マイシーソーク(MAI SI SOK)(菱田注：肘を使う術)と呼ばれ、アユタヤ時代(1350～1767)からラタナコーシン時代(1782～現在)初期にかけて、パフユ(PAHUYUTH)(multi-facets fight)と呼ばれるようになり、後にムエタイ(MUAY TAI タイ族の拳法)と呼ばれるようになり、ラタナコーシン中期になり、国名がSIAMからTHAIへ変わった後は、ムエタイ(MUAY THAI)(菱田注：タイ国の拳法)と呼ばれるようになった。」⁵⁰

National Culture Commission (1997)によると次のようである。

「ムエタイの歴史について、ムエタイに関する資料の殆どは、度重なるビルマとの戦争により焼失している。また、ムエタイは、外部の者に知られないようにするため、書伝ではなく、口伝で伝えられてきたため書物も残っていない。」⁵¹

「タイ族前史時代とスコータイ時代は、戦国時代で同じタイ族の間でも紛争はたえず、各地で戦乱があった。南部のタイ族は、仏暦1400年(西暦857年)にmekhongメコーン川の南に fhang という都市を創った。スコータイ時代の末にスコータイの土地を奪うため、アユタヤが戦争を仕掛けていた約6年間で人民に多くの死傷者が出た。その頃から軍人だけでなく、民間人にも自己防衛手段としてムエタイが練習され始めていた。軍隊においては、当時の戦術が接近戦を主要なものとしていたため、接近戦のためにムエタイの技術が訓練されていた。相手が武器を持っている場合は、手より長い足が有利なために蹴り技が訓練されていたとケート・シーヤパイ⁵²によって『fah muang thai(菱田注:ファーンムアンタイ、タイの空)』という雑誌に中の訓練の様子が書かれている。」⁵³

「スコータイ時代、成人する前に男子は、勇敢な戦士に成長するためにムエタイやkrabi,krabon(クラビー,クラボン)を寺院で練習していた。寺院は、知識を与え、身体を鍛える場所であり、更には人々の中心のような場所で一般人だけでなく、役人も学習する場所であった。また教師は寺の僧や役人、そして知識人とされる者であった。」⁵⁴

ムエタイの発生は、タイで一般に、スコータイ時代(1238～1377)の戦時に軍事訓練が

⁵⁰ Kraitus 1988,pD

⁵¹ National Culture Commission 1997, p10

⁵² ケート・シーヤパイは、伝統ムエタイのムエチャイヤーを受け継ぎ、元ルンピニースタジアム代表を務めた。(Fig.11)

⁵³ National Culture Commission 1997 pp10-11

⁵⁴ National Culture Commission 1997, p13

ら発生したと言われているが、はっきりしたことはわかっていない。ムエタイの研究者 Peter Vail は、ムエタイが軍事訓練に用いられていたことは、もっともらしい見解ではあるが、それを裏付けるような根拠はなく実際にムエタイが軍事訓練であったのかは推測の域を出ることはないと言っている⁵⁵。

たしかに近代的な銃のない時代の戦争の手段を考えると、敵に近づき弓で矢を射る、さらに距離が近づくと刀で切り合うことになる。手に武器を持っていた場合に蹴り技が発達するということも考えられるし、素手による取っ組み合いが始まるのも考えられる。そして拳や肘、膝などの身体のあらゆる部分を使い闘うことになるのは自然であろう。それがムエタイの原型になったと考えられているのは理解するのに難しくない。しかし、ムエタイが娯楽のためのものだけではなくて戦争のための白兵戦（接近戦）の技術であったという点は、はっきりとは分かっていない。軍事訓練であったという説を唱えたケート・シーヤパイは、陸軍によって経営されるルンピニースタジアムの初代支配人であり、ルンピニースタジアムが創られた 1956 の当時のタイがナショナリズム旺盛な時代であったため、ムエタイを軍事訓練として始まったと位置づけようとしたのではないかと考えられる。ムエタイの白兵戦起源説については Vail もこれに否定的な論証をおこなっていることから、この問題は、当分は未解決としなければならない。

また、ムエタイが兵士だけでなく、一般の民間人にも寺院において練習されてきたというのは、当時の寺院がさまざまな教養を身につける場として機能しており、現在のムエタイにも仏教理念を教えられる儀礼などが見られることから寺院がムエタイを伝える場所になってきたのは考えられる。（次項に詳しく述べる。）

第二項 護身術としての理念

本項では、白兵戦のためのものではなく護身術として体系化され、伝承されてきた伝統的なムエタイとしての武術の理念を見ていきたい。伝統ムエタイとは、近代的な装備であるグローブやリングの導入前のムエタイのことを指し、現在の近代ムエタイと比較して、ムエボラーン（伝統的ムエタイの意味）と呼ばれ、現在もこれを継承しているジムがある。

最古のムエタイ教本であるタムラームエ（第三項参照）の絵には、タイ仏教の特徴を示すモンコン（Fig.14）などが見られる。モンコンは、経文の書いた布を丸めて作った護符⁵⁶であり、僧によって祈られる。このモンコンから分かるように、この時代には、すでにムエタイが仏教と関係があったことが伺える。また、ムエタイが仏教的格闘技であるということを示す文献 Kaya 『Sirrappa haeng MuayThai (Glimpses of Muay-Thai;The Siamese

⁵⁵ Vail 1998, pp56-61。

⁵⁶ この護符は、パーヤンと呼ばれ、僧によって祈祷された古代クメール文字などで書かれたものである。（Fig.13）

Art of Buddhatantric Self-defense)』1989 には、ムエタイは、博識な僧によって技能教育として教えられたということが述べられている⁵⁷。



Fig.10 ラーマ三世 1824～1851 時代の教本

頭には、仏教の経文の書かれた護符が巻かれている⁵⁸。

伝統ムエタイの理念を史料によって確認することは不可能なため、伝統ムエタイを継承するムエチャイヤー（チャイヤー地方の拳法）のジムにて、伝統ムエタイの師範、レック氏にインタビューを行った⁵⁹。伝統ムエタイのムエチャイヤーでは一番大切なことはなんですか？とたずねると「良い人になることが一番大切であると教えています。」と答えられた。この言葉には、ムエボラーンの精神的な支柱となる仏教観が伺える。

レック氏によれば、このような仏教的な観念は、ギャンブラーに影響される現在のムエタイにおいても残されていると以下のように語った。

「現在のムエタイにおいても、試合は勝てば十分であり、わざわざ倒す必要はない。これは、タイのプラペニー（昔からの慣習）である。」と言う。倒さなくても勝てば十分であると言うのである。ムエタイのテレビ放送を見ていると、ムエタイの実況中継をしているアナウンサーが同様な発言をする場合が多々見られる。「勝負が着いたようですね、双方は、プラペニーで相手への攻撃をやめました。」と言うのである。この相手への手加減は、確かに仏教的な慈悲の観念と言え、そのようにも見る事ができる。筆者のムエタイ経験から言えば、「必要以上に相手を痛めつけたくない」という心情も理解できるが、すでに勝っているのだから、これ以上の「リスクを負いたくない」という気持ちも少なからず存在している。このような勝負観は、ムエタイに限らずタイ人の行う国際式ボクシングの試合などにも度々見ることができる。つまり、最終ラウンドになり勝者となる選手がはっきりしてくると、積極的に相手に攻めることをしないのである。

⁵⁷Kaya 1989, p9

⁵⁸Panya Kraitus 1988, pp5-13 タムラームエは、チャナソクラーン寺院で発見され、現在タイ国立博物館に保存されている。(National Culture Commission 1997,p30)

⁵⁹ レック氏は、ムエチャイヤーのケート・シーヤパイ(Fig.11)、トン・ヤラー (Fig.12) の弟子である。 2006.1.19 エッカマイ レック師範 49 歳

彼は、このような相手を思いやる気持ちは、現在のギャンブルの影響のあるムエタイ興行においてもタイ仏教の観念から脈々と受け継がれているものであるとレック氏は語る。(この現在の勝負観については第三章で述べる。)彼は、彼自身にプロムエタイの経験はないが、彼によれば、現在のプロムエタイ選手にもムエチャイヤーを練習する選手が多く存在し、また彼は本来のムエタイボラーン(伝統ムエタイ)は相手を仕留めることなく、相手をコントロールするのが理想であると語った。



Fig.11 ケート・シーヤパイ

(彼は初代ルンピニースタジアム支配人であり、ムエチャイヤーの師範である。)
Prayukvong, 2001 p37 より



Fig.12 トン・ヤラー(ケート・シーヤパイの弟子である。) Prayukvong, 2001 p37 より

次に、ムエタイの試合には、欠かすことのできない儀礼にもタイ仏教の特徴が表れる。現在のムエタイは、試合の前に必ず、『感謝の舞い』を舞わねばならない。これはムエタイを授けてくれた師匠や、両親などに感謝を示す儀礼である。ムエタイが武術であった時だけでなく、近代ムエタイの誕生以降も、この『感謝の舞い』は、必ず闘う時には、行わなければならない儀礼として受け継がれてきている。以下に感謝の舞いを行う過程にも宗教的な儀礼が存在する事を示したい。

入場の儀式

ムエタイ選手は、リングに入る前にプットンラクサー（仏よ、御守下さい）、タンマンラクサー（法よ、御守下さい）、サンカンラクサー（お坊様よ、御守下さい）と三回唱えてリングに入る。これは、仏法僧に守護を願うという意味である。

闘いの舞い

この舞いの代表的な形には、『プロムシーナー』（四面神の舞い、ブラフマン⁶⁰の舞い）というバラモン教の神様の形を真似た舞いがある。意味は、プロムハンシー（四つの良い事）を示している（四無量心、四梵のこと）。つまり、慈悲喜捨でのことである。この舞いの意味を説明すると以下のようである。

メター（慈、慈しみ 他人を幸福にしようと希望する無量心を持つ事）

カルナー（悲、悲しみ 他人の苦勞を理解同感し他人を苦しみから解放してやりたいと思う気持ち）

ムティター（喜、喜び 多くの人々の幸福を見てよろこぶ事）

ウベカー（捨、公平、公正、中立、不偏、無関心という意味）

（タイ日辞典 富田竹二郎 養徳社）より

という意味がある。これらの入場の儀式や、舞いの意味（慈悲喜捨）が示しているようにムエタイにはタイの仏教的な観念が存在しているのがわかる。

これらの儀礼やムエタイの装備に仏教的な護符があることや、僧が寺院で教養としてムエタイを伝えてきているため⁶¹、護身術として伝承してきたムエタイには、仏教哲学や道徳を尊ぶという理念があることもうなずける。

⁶⁰ 仏教が伝わる前のバラモン教、ヒンドゥー教の神

⁶¹ National Culture Commission 1997, p13



Fig.13 ムエタイのジムに飾られる護符パーヤン



Fig.14 パーヤンで編まれたモンコンを装着し闘いの舞いを舞う選手

第三項 武術ムエタイの技法

近代以前のムエタイ技術については、これを明らかにする資料は十分でない。以下に説明するように、ラーマ 3 世時代の絵画資料（タムラームエ）や、ラーマ 5 世時代に創られた軍人学校の練習風景の写真、それに前近代ムエタイを継承すると称するレック師範が主催するムエチャイヤー程度にとどまっている。本論文では、その歴史再構成能力に限界があることを認めつつも、それらが現段階で唯一、依拠すべき資料である事にかんがみて、これから資料を前近代ムエタイの技術を再構成する資料として用いることとする。

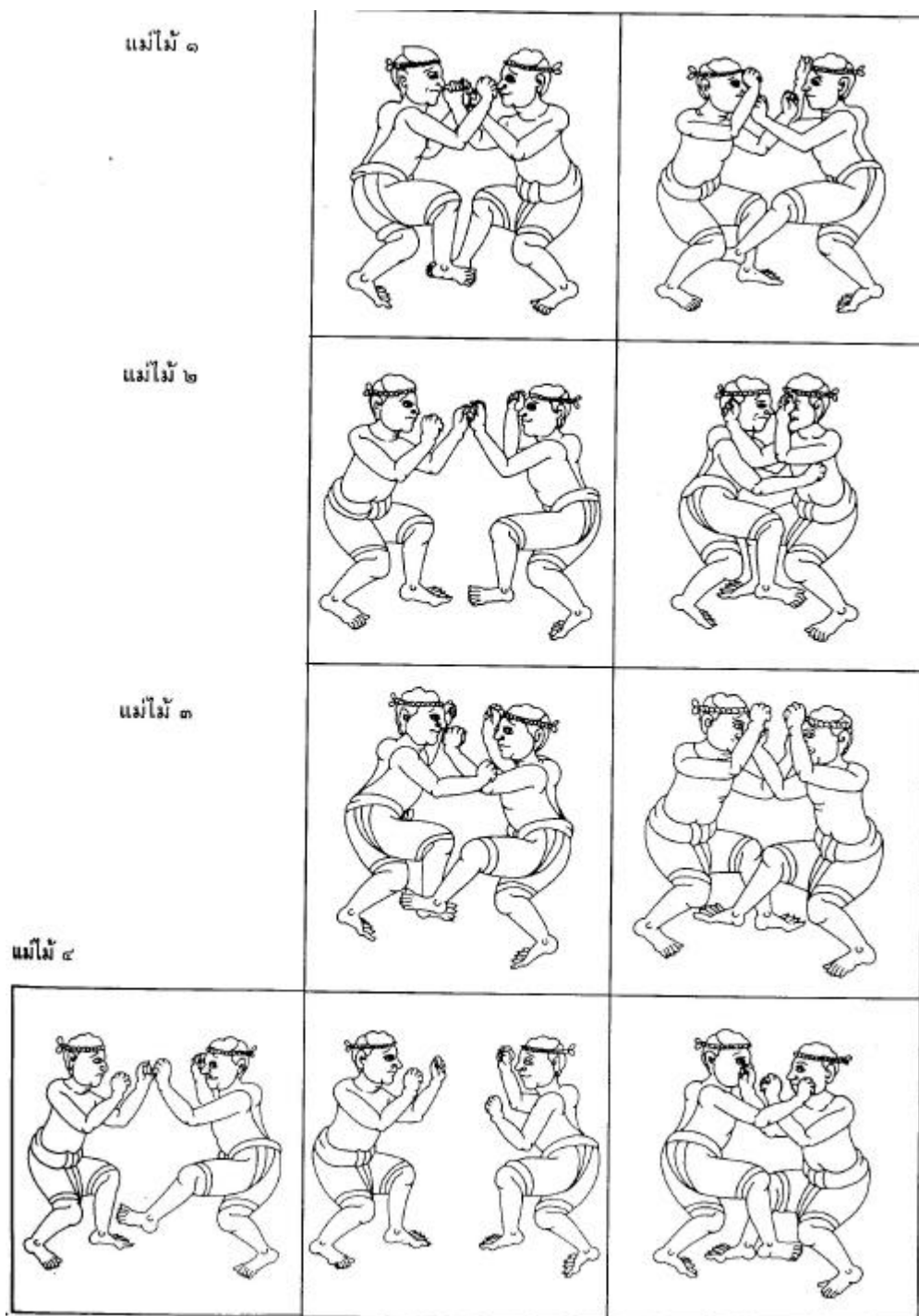
National Culture Commission によれば「ラタナコーシン時代に入り、ラーマ 3 世の御世（菱田注:1824～1851）にムエタイの重要な文献が書かれた。Tumuramuay タムラームエという記録された最古のムエタイの教本である。この本は、ムエタイの動作を絵で表し

ていた。全部で46の形があり、maemai メーマイ（ムエタイの基本）、lukmai ルークマイ（ムエタイの応用技）、maigae マイケー（ムエタイの解決法）に分類されている。メーマイは、23の絵の中に12の形があり、ルークマイは、21の絵の中に12の形がある。現在この書は、国立博物館に保存されている。」⁶²とある。

この絵の技法を見ると打撃技だけでなく、相手の身体を掴み、組み合いや逆関節を取る技法が読み取れる。また、打撃技で相手を打突するまでに相手の身体のバランスを崩したり、相手の身体を固定して動けぬようにする技法が用いられている。この絵には、寝技は見られないが、柔道のように、相手の身体の下にもぐる動作が見られるために、投げ技なども用いられていたと見ることができる。

⁶² National Culture Commission 1997,p30

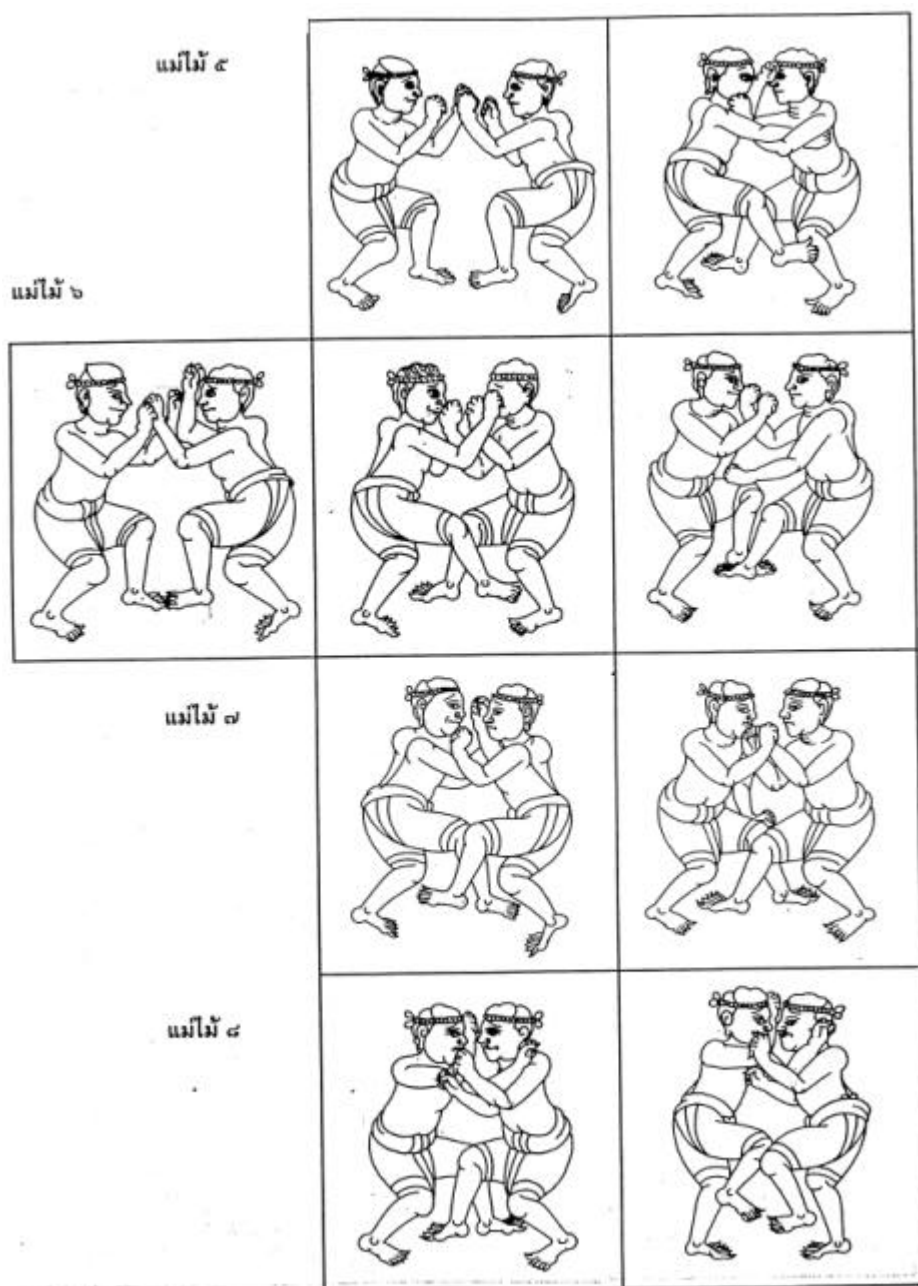
Fig.15



メーマイ 1 ~ 4

(蹴り技よりも手による攻撃が多用されていたことが分かる。)

Fig.16



ムーマイ 5 ~ 8

(現代のムエタイにはない手の裏による攻撃などが見られる。)

Fig .17

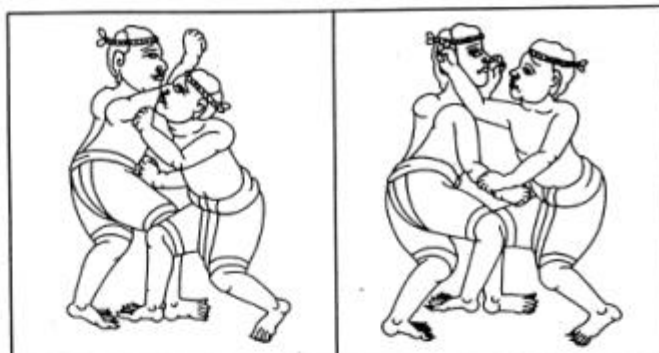


เมอร์ไม 9~10 ลูคไม 1~2

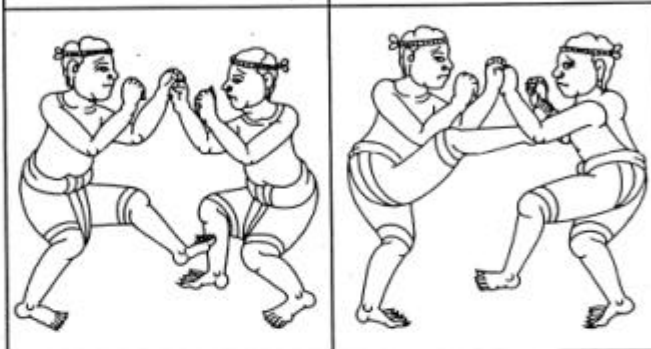
(เมอร์ไม 9 には、関節技が見られる。เมอร์ไม 10、12 には、相手の蹴り技を取っていることが分かる。ルークマイ 2 では、肘打ちが見られる。)

Fig.18

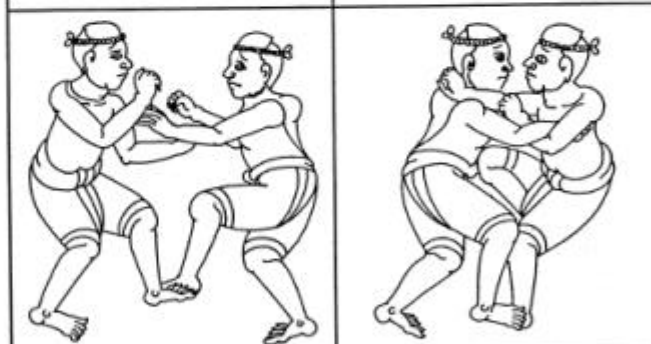
လူကမို ၁



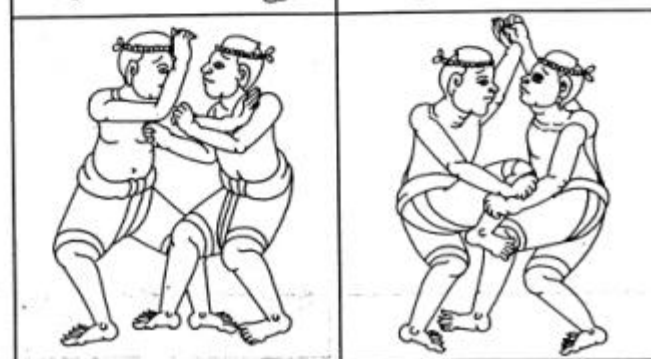
လူကမို ၂



လူကမို ၃



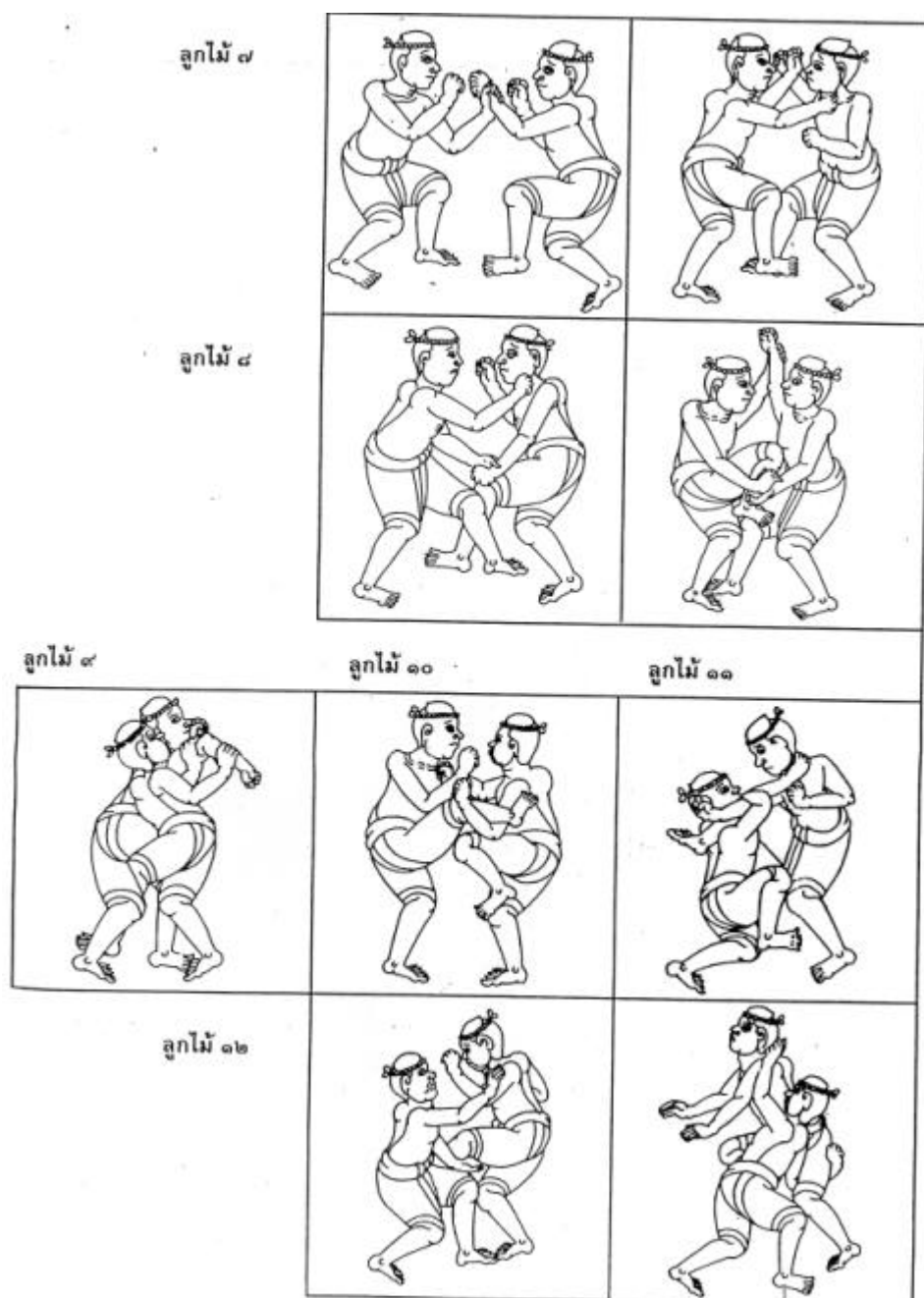
လူကမို ၄



လူကမို ၃ ~ ၆

(လူကမို ၃ သည်, နံရိုးကို ခြေထောက်ဖြင့် တိုက်ခတ်သည်။ လူကမို ၄ သည်, နံရိုးကို တိုက်ခတ်သည်။ လူကမို ၅, ၆ သည်, နံရိုးကို တိုက်ခတ်သည်။)

Fig.19



ルークマイ 7~13

(ルークマイ 7 では、相手の頸動脈を指で攻撃していることが分かる。ルークマイ 13 では、相手の下にもぐり込み投げる姿勢が窺える。)

これらの絵からは、絵の解説がないため分かりにくいですが、絵の動作から、この当時に、投げや関節技が含まれていたことが分かる。また、この絵の中には、組み合って肘打ちを出す動作や相手の胴体に膝蹴りを打ち込む動作も窺える。

手による攻撃は、空手の動作に近い正拳突きや下段突き、アッパーカットのような上げ打ち、上腕を使った廻し打ちなども見ることができる。

足技は、相手を直線的に攻撃する蹴り（空手の前蹴りのような蹴り）や膝蹴りは、見られるが、現在の近代ムエタイの主流になっている横から曲線を描きながら蹴る（空手の廻し蹴りのような蹴り）は、絵から窺うことができない上に、顔面を狙うような高い蹴り（空手の上段蹴り、ハイキック）のような蹴りもなく、大腿部を狙うような蹴り（空手の下段蹴り）もこの絵からは見ることができない。

このような横から曲線を描く蹴りの少ない事は、この時代のムエタイは、蹴りが主体ではなく、手による打撃と組み合いからの打撃が主であったと考えられる。横からの蹴りや、蹴り足が相手の腰より高くなれば、相手に投げられる確率が高く、投げられたほうは、圧倒的に武術として不利な状況に陥る。できるだけ、自分の重心を低くし、相手に崩されないようにしなくては、実戦での武術では対応できなかったと窺うことができる。

絵は当時の動きを正確に記述したものでなく、多少のデフォルメを考慮してもこの当時の絵には、現在のムエタイの象徴ともいえる打点位置の高い、ミドルキックやハイキックのような廻し蹴りが見られなかった。

次に、今日ある伝統ムエタイの一つであるムエチャイヤージムの基本練習から、元来ムエタイが持っていた伝統的な技法を読み取りたい。

拳による技法は、素手であるため空手のように拳の握りから練習され、受けは空手の上段受けに近い受け方が取られ、蹴りは前方への蹴り（空手の前蹴りに近い）が主に訓練されていた（下の写真が基本動作）。このムエチャイヤーの基本練習にも相手の身体を横から蹴る動作はなく、身体の中央部を前足で止める動きや、相手の軸足を前足で止める技法が多用されており、廻し蹴りのような遠心力を使う動作が基本練習に含まれていなかった⁶³。



Fig.20 ムエチャイヤーの対人の構え、前方への蹴りを多用する。

⁶³ 2006.1.19 ムエチャイヤー道場 レック師範 エッカマイ、バンコク



Fig .21 ムエチャイヤーの正面から見た基本の構え

(ムエチャイヤー道場 レック師範 エッカマイ, バンコク 2006.1.19)

このレック師範が教授するムエチャイヤーの教則 DVD「Peut gru muaythai khaad cheauk Chaiya(菱田注:パート・クル・ムエカッチュアク・チャイヤー, ムエチャイヤーの秘密を明かす)」⁶⁴には、ムエチャイヤーの継承者であるケート・シーヤパイ (Fig.11) から伝授された伝統的な拳の握り方、立ち方、構え方、受け方、歩法、攻撃法、対人によるカウンター攻撃などの技術が見られたが、これらの中には、遠心力を使った廻し蹴りが見られなかった。

これらの資料(タムラームエ、上記のムエチャイヤーのDVDなど)では、ムエタイの技法は、武術として記されており、ムエタイが武術として、投げたり蹴ったりするだけでなく、関節技や締め技のような相手を制する技法が訓練されていたことを窺い知ることができるが、ムエタイのこれらの技法練習の中にも、現在のムエタイの主な特徴である廻し蹴りは見られず、組んでの膝蹴りも特に注目される技術ではなかった。

⁶⁴ 「Peut gru muaythai khaad cheauk Chaiya」Unlock the Secrets of Muay Kaad Chuek Chaiya, codified by Grand Master Kaet Sriyapai 2003.10.3